

横浜合唱協会 第67回定期演奏会



2017年5月21日(日)
めぐろパーシモンホール大ホール
主催：横浜合唱協会

横浜合唱協会 第67回定期演奏会

モンテヴェルディからバッハへ

～言葉を伝える音楽の誕生とその継承～

◆C.モンテヴェルディ (1567～1643)

- ・ *Ecco mormorar l'onde* / 波はささやき
- ・ *O primavera, gioventù de l'anno* / おお春よ、萌えいずる季節よ
- ・ *A un giro sol de'belli occhi lucenti* / 輝く美しい瞳をめぐらすだけで
- ・ *Lamento della ninfa – Amor* / ニンフの嘆きより – 愛の神よ
- ・ *Confitebor tibi, Domine* / わたしは心を尽くして主に感謝をささげる

◆G.フレスコバルディ (1583～1643)

- ・ *Nona Sopra tre soggetti* / ファンタジア第9番 (オルガン独奏)

◆Ch.ベルンハルト (1628～1692)

- ・ *Aus der Tiefe ruf' ich, Herr, zu dir* / 深き淵の底から、主よ、あなたを呼びます

◆H.シュッツ (1585～1672)

- ・ *Tröstet, tröstet mein Volk* / 慰めよ、わたしの民を慰めよ SWV382
- ・ *Selig sind die Toten* / 死ぬ人は幸いである SWV391

— 休 憩 —

◆G.Ph.テレマン (1681～1767)

- ・ 協奏曲 ト短調 BWV985 (オルガン独奏/バッハによる編曲)
- ・ *Das ist meine Freude* / わたしは幸いとする TWV 8:17
- ・ *Selig sind die Toten* / 死ぬ人は幸いである TWV 8:13

◆テレマン & バッハ

- ・ *Sei Lob und Preis mit Ehren* / 讃美と誉れが栄光とともに BWV231

◆J.S.バッハ (1685～1750)

- ・ *Christ lag in Todesbanden* / キリストは死の絆につきたまえり BWV695 (オルガン独奏)
- ・ *Komm, Jesu, komm* / 来たれ、イエスよ、来たれ BWV229

指 揮：山 神 健 志
ソ プ ラ ノ：木 島 千 夏
オ ル ガ ン：山 口 綾 規
ヴァイオリン：小 野 萬 里、原 田 純 子
チ ェ 口：小 貫 詠 子
合 唱：横 浜 合 唱 協 会

ごあいさつ

本日は横浜合唱協会第67回定期演奏会にご来場いただき誠にありがとうございます。

今回は「言葉を伝える音楽の誕生とその継承」というテーマです。語るように歌うという、今では当たり前の様式が、実は450年前モンテヴェルディによって発展したのだということを知ったときの驚きはとても新鮮なものでした。西欧音楽の歴史を知れば知るほど現代の私たちとの深いつながりを感じざるを得ません。歌う事を通じて情景や感情を共有できるような時間を持てたら幸せです。是非お楽しみ下さい。

また、10月13日に横浜みなとみらいホール大ホールで、一昨年のドイツ旅行で共演したアミチ・ムジケを招いて特別ジョイントコンサートを開催致します。こちらも是非ご来場お待ち申し上げます。

当会は、音楽の情熱に燃える人にとってますます魅力的な活動を展開していきたいと思っております。興味をお持ちの皆さまには是非とも練習に参加していただければと切に願っております。

今後とも引き続き皆様方のご支援をお願い申し上げます。

2017年5月21日

横浜合唱協会 代表 清水 光洋

プロフィール

山神 健志（やまがみたけし／指揮）

1973年生まれ。自由学園最高学部卒業、東京藝術大学卒業後イタリアに留学。帰国後、合唱指揮者として活動を開始。現在は児童合唱から大規模な混声合唱まで多くの合唱団の常任指揮者を務めるほか、各地で市民参加による公募合唱団を指導。最近ではベートーヴェン『第九』（指揮：ヤクブ・フルシャ）、ドヴォルザーク『スタバト・マーテル』（指揮：広上淳一）、ヴェルディ『レクイエム』（指揮：三ツ橋敬子）、ブラームス『ドイツ・レクイエム』（指揮：広上淳一）の合唱指揮を担当。2017年にはアンドレア・バッティストーニ指揮ヴェルディ「レクイエム」にて250人の合唱団をまとめ、好評を博す。その的確な指導は共演した内外の指揮者や合唱団から信頼を得ている。また、オーケストラと歌う素晴らしさを子供から大人まで広く体験してもらおうと精力的に活動し、これまでにジョン・ラッターの『子どもたちのミサ』（オーケストラ版日本初演）、上田真樹『あらしの夜に』（オーケストラ版委嘱初演）をはじめ、多くのコンサートを企画、指揮している。バロック音楽から現代まで、幅広い活動の中でも、特にオケ付き宗教音楽での評価が高い。今後の活躍が期待されている指揮者である。

木島 千夏（きじまちなつ／ソプラノ）

国立音楽大学卒業後、同大学音楽研究所の研究員としてバロック歌唱の研究と演奏活動に従事。ロンドンのギルドホール音楽院に留学。第30回ブルージュ国際古楽コンクールにて4位入賞。ヨーロッパ各地で音楽祭や演奏会に出演し経験を積む。帰国後はバロックを専門にソリストとして活躍。古楽ユニット「ひとときの音楽」シリーズや横浜山手の洋館でのリサイタルを毎年開催し、身近で楽しめる独自のコンサート作りを続けている。2006年には知られざる天才作曲家G.F.ピント没後200年を記念したコンサートをフォルテピアノ（上尾直毅氏）と行った。「カペラ・グレゴリアーナ ファヴォリート」メンバーとしてヴァーツ国際グレゴリオ聖歌フェスティバルに出演、CD『究極の音楽』『至高のハーモニー』をリリース。アンサンブルDD、アンサンブル・レニブスのメンバーとして、声楽アンサンブルの活動にも力を入れている。現在、聖グレゴリオの家教会音楽科講師、横浜合唱協会ヴォイストレーナー。

プロフィール

山口 綾規 (やまぐちりょうき／オルガン)

早稲田大学政治経済学部経済学科卒業。東京藝術大学音楽学部別科オルガン専修を経て、同大学大学院修士課程音楽研究科(オルガン)を修了。これまでにパイプオルガンを大槻由美子、ブライアン・アシュレー、廣野嗣雄の各氏に師事。東京を中心に、アメリカ、中国、マレーシアなど、国内外で積極的に演奏活動が続いている。クラシックからジャズ、ポピュラーまで、ジャンルの垣根を超えた多彩なレパートリーには定評があり、わかりやすく楽しさ溢れるコンサートは、各地で新たなオルガンファンを生み出している。またオルガンのみならず鍵盤楽器全般の教育にも力を注いでおり、後進の指導はもちろんのこと、指導者向けのセミナーや出版物なども多数手がけている。我が国の音楽教育のレベルアップを目標に、英国王立音楽検定(ABRSM)の普及にも取り組んでいる。昭和音楽大学非常勤講師。日本オルガニスト協会会員。全日本ピアノ指導者協会(ピティナ)正会員。 <http://www.ryoki.org/>

小野 萬里 (おのまり／ヴァイオリン)

東京藝術大学を卒業。在学中バロック・ヴァイオリンに出会い、古楽の研究を始める。1973年ベルギーに渡りシギスバルト・クイケン氏に師事。帰国後は東京コンチェントウス・ムジクスを皮切りにソリスト、室内楽奏者、東京バッハ・モーツァルト・オーケストラ、やバッハ・コレギウム・ジャパンなど国内の主要な古楽オーケストラのメンバーとして活躍。1999年には木村三穂子氏とヴァイオリン2本のデュオ「Due Canti」を結成、日本とドイツでツアーを行った。これまでにA.ヴェンツィンガー、F.ブリュッヘン、クルト・エクイルツ、トン・コープマン、小林道夫、故大橋俊成、多田逸郎など内外の著名な音楽家たちと共演を重ねてきた。現在、古楽アンサンブル「コントラポント」「クラシカルプレイヤーズ・東京」「チパンゴ・コンソート」「ムジカ・レセルヴァータ」メンバー。

原田 純子 (はらだじゅんこ／ヴァイオリン)

洗足学園音楽大学付属高等学校音楽科を経て洗足学園音楽大学を卒業。ヴァイオリンを鈴木嵯峨子氏に、ヴァイオリン・室内楽を海野義雄氏、ヴィオラ・室内楽を岡田伸夫氏に師事。在学中慶應バロックアンサンブルに参加したのをきっかけに、古楽器での演奏に興味を持ち卒業後バロックヴァイオリン・ヴィオラを渡邊慶子氏に師事する。都留・札幌・福岡での古楽祭に参加し、ルーシー・ファン・ダール、シギスヴァルト・クイケン・寺神戸亮の各氏のレッスンを受ける。またフランスフォンテンブローの講習会で森悠子氏・アレッサンドロ・モッチア氏のレッスンを受ける。

現在は音楽教室講師、モダン・バロックのヴァイオリン・ヴィオラ奏者として室内楽を中心に活動している。弦楽合奏団アンサンブルデュナミス、アンサンブル山手バロックメンバー。

小貫 詠子 (おぬきえいこ／チェロ)

都立芸術高等学校を経て東京藝術大学入学。在学中、ウィーン国立音楽大学主催の講習会に大学から派遣される。松尾音楽奨励賞受賞。同大学卒業後、同大学大学院修士課程に入学。リゾナーレ音楽祭にてマイカル賞受賞。ドイツ国立アウグスブルク・ニュルンベルグ音楽大学入学。在学中ズビン・メータ指揮の学校主催オーケストラオーディション合格。現在、埼玉県立大宮光陵高等学校音楽科チェロ非常勤講師。バンベルグ東京カルテットメンバー。クラシック他ミュージカルなどでも演奏。チェロを河野文昭氏、マルクス・ワグナー氏に師事。

モンテヴェルディからバッハへ ～言葉を伝える音楽の誕生とその継承～

◆ C. モンテヴェルディ (1567～1643年) 今年は“生誕450年”に当たります！

“450年前って”日本では室町幕府の末期、“織田信長”が台頭する頃だと知った時、全く古さを感じさせないモンテヴェルディ音楽への親近性と、歴史的な遠さとの差異に驚かすにはられません。モンテヴェルディに代表されるイタリア初期バロック時代に“言葉を伝える音楽”が誕生します。その核となるのが詩や歌詞を「レチタール（語るように）・カンタンド（歌う）」こと、言ってみれば“演歌”にも通じる歌の王道となった様式です。

イタリアルネサンスは絵画・美術、詩と文学、音楽等で花開き、その後のヨーロッパ芸術の豊かな土壌を築きました。音楽に大変革をもたらしたイタリア詩は、“ダンテ”、“ペトラルカ”からの伝統である「定音節」、即ち11音節や7音節による定型詩で、日本の七・五調による和歌・俳句に通じるところがあり親近感が持てますが、それに「脚韻」「アクセントリズム」が加わり、愛と死の喜び、苦しみ、嘆き等を劇的に大胆かつおおらかに表現しました。

この詩にモンテヴェルディの音楽靈感が触発されて生まれたのが珠玉のマドリガーレです。まず第2巻、第3巻、第4巻から魅惑の曲を1曲ずつお聴き下さい。



・ *Ecco mormorar l'onde* / 波はささやき マドリガーレ第2巻 (1590年)

テノールが静かに“波のささやき”を歌い出し、“そよ風”が朝の気分を伝えます。続いて、“鳥のさえずり”、“東の空のきらめき”、“真珠のような朝露”、“黄金色の山”が描写されていきます。そしてクライマックスに至り、“ああ美しい暁”、“使者のそよ風”は、私のこころを蘇らせてくれる、と結びます。音で描く美しい絵画のようです。

・ *O primavera, gioventù de l'anno* / おお春よ、萌えいずる季節よ マドリガーレ第3巻 (1592年)

冒頭の“おお春よ”、“新しい愛の母よ”との喜びは、過ぎ去った日の“回想”だったのです。中ほどに入ると、曲調は大きく変わり、今の私はかつてのような“優美で美しかった私”ではないと嘆きます。

・ *A un giro sol de' belli occhi lucenti* / 輝く美しい瞳をめぐらすだけで マドリガーレ第4巻 (1603年)

この第4巻に取り組む前に、対位法の権威筋から“大胆な不協和音”や“対位法に違反した”作曲法への攻撃を受けます。“言葉を伝えることが大事なのだ”、“私の作曲法は、伝統的な作曲法とは一線を画した、新しい作曲法「第二作法」である”と主張し信念を貫きました。

論争後に作られた本曲は、“彼女の美しい瞳の輝き”への賛美の描写で始まりますが、後半一転、けれど、“その彼女が私に残酷で意地悪”になり、私は死んでしまいたい“と、強烈な不協和音で嘆きます。

この後マドリガーレの様式はさらに大きな変化を見せます。第5巻からは通奏低音が登場し、その上で独唱する“モノディー様式”と呼ばれる新しい様式で、歌詞の表出により主眼を置くマドリガーレが多く生み出されました。

・ *Lamento della ninfa - Amor* / ニフの嘆きより - 愛の神よ マドリガーレ集第8巻 (1638年)

曲は三部からなっており、恋人に裏切られたニンフがその嘆きを歌い、男声三声がそれに呼応します。

・ *Confitebor tibi, Domine* / 主に感謝をささげる “倫理的・宗教的な森” 曲集より (1640年)

最後にモンテヴェルディがサンマルコ大聖堂の楽長に就任 (1613年) して以来、典礼で演奏してきた曲をまとめ上げた宗教曲集から1曲を取り上げました。初期の“ルネサンス的なミサ曲”とは違って、通奏低音上で自由に歌うソプラノと合唱が掛け合うバロック的なコンチェルト曲となっています。

以上のように、モンテヴェルディにとって、マドリガーレは、20歳での第1巻から、晩年71歳の第8巻まで、生涯にわたりライフワークとして取り組んだジャンルで、ここに見られる作風と様式の変遷・深化は驚異的で、ルネサンスからバロックに移っていく音楽の転換の足跡を見事に刻んでいます。

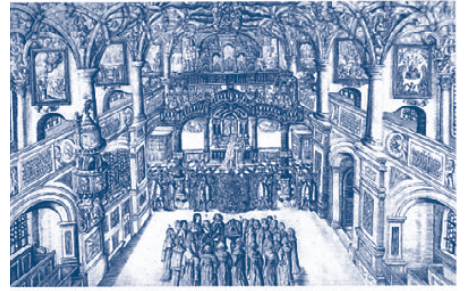
◆ G. フレスコバルディ (1583～1643年) バッハに大きな影響を与えたイタリアのオルガン曲の大家

・ *Nona Sopra tre soggetti* / ファンタジア第9番 (オルガン独奏)

フレスコバルディはローマの聖ピエトロ大聖堂のオルガニストを務め、オルガン奏者の巨匠であり、作曲家としてはイタリア国内及び17世紀後半のドイツで非常に多く写譜され、ブクステフーデやバッハにも大きな影響を与えました。

◆ H. シュッツ (1585～1672 年) ヴェネツィア留学の成果を取り込み“ドイツ音楽”を確立した「ドイツ音楽の父」

ドレスデン宮廷楽長 (右図) を務めたシュッツは、生涯で2度ヴェネツィアに留学しています。第1回目は1609年 (23歳) で G.ガブリエリ等から、壮大華麗な複合唱やレチタール・カンタンド様式を学んでいます。モンテヴェルディと交流のあったのは第2回目、1628年 (42歳) で、モノディー法、協奏法、劇的表現法等の斬新な手法を学びました。



本日は円熟期の宗教合唱曲集(1648年)からの2曲をお聴き下さい。

・ *Tröstet, tröstet mein Volk* / 慰めよ、わたしの民を慰めよ SWV382

待降節の曲で、歌詞は“イザヤ書”から採られ、冒頭の“わたしの民を慰めよ”、中心部の“荒れ野に呼びかける声がある”、結びの“主の栄光が現れる”という、主を迎える重要な三つの歌詞を柱に据え、良く聴きとれるように“6声のホモフォニック”で歌わせ、その他の曲間のところは3声×2群の掛け合いが中心となりながら進行します。

・ *Selig sind die Toten* / 死ぬ人は幸いである SWV391

葬儀用の曲で、“ヨハネ黙示録”から採られた有名な聖句ですが、ブラームスはシュッツを良く研究していて、“ドイツレクイエム”の最終章にこの歌詞を採用しています。全体は対位法で進行しますが、中心におかれた“Ja, der Geist spricht, / 然り、と聖霊も言う”はゆったりとした“ホモフォニー”で浮き立たせています。ブラームスはこの手法を取り入れ自身の“ドイツレクイエム”の同じ歌詞のところで、シュッツのオマージュのように引用しています。

◆ Ch. ベルンハルト (1628～1692 年) シュッツ三大弟子の一人で教えを理論書に著し後世に継承

・ *Aus der Tiefe ruf' ich, Herr, zu dir* / 深き淵の底から、主よ、あなたを呼びます

ベルンハルトは横浜合唱協会が前々回の定期演奏会で取り上げたJ.タイレと並ぶシュッツ三大弟子のひとり、特にシュッツの音楽実践を理論書に記述し、ドイツ中に伝播させ、かつ後世にも残しました。

◆ G.Ph. テレマン (1681～1767 年) 今年は“没後 250 年”にあたります！

モンテヴェルディ生誕から200年を経た1767年、日本は元禄文化が幕を閉じ、江戸時代も後半に入り財政難から享保・寛政の改革が続く頃です。ドイツではプロイセンが勢いを増した頃です。テレマンはライプツィヒ大学に学び、学生からなる楽団コレギウム・ムジクムを創設しました。その後アイゼナハ、フランクフルトで活動し、さらにライプツィヒ市からのトーマス・カントールの招聘を断って、1721年から46年間終生にわたってハンブルク市の音楽監督を務め、オペラ、コンサート、教会音楽の演奏や出版を精力的に行い、当時のヨーロッパ随一とも言われる高い人気と名声を獲得しました。

・ 協奏曲 ト短調 BWV985 (オルガン独奏/バッハによる編曲)

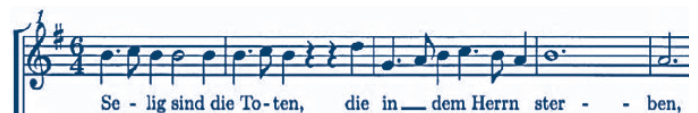
3楽章構成で、テンポ指定なしのト短調3/8で始まり、アダージョ楽章ハ短調4/4を経て、アレグロ楽章のト短調4/4で結ばれます。

・ *Das ist meine Freude* / わたしは幸いとする TWV 8:17

神の近くにある幸いを、喜び(Freude)の音型で軽やかに歌います。中間部は下3声で緩やかになり、結びの“御業の全てを伝え”では、全て(alle)の歌詞に冒頭の喜びと同じ音型が再現され軽やか曲を締めます。

・ *Selig sind die Toten* / 死ぬ人は幸いである TWV 8:13

前半ステージのシュッツ宗教合唱曲と同じ歌詞です。葬送やレクイエムに良く用いられるこの有名な聖句を、テレマンは“シチリアーノ舞曲リズム”(右譜)で開始しました。



バッハが“マタイ受難曲”のアルトアリア“神よ、憐れみ給え”において、心に沁みる珠玉の曲を生んだ舞曲リズムです。中心の“Ja, der Geist spricht, / 然り、と聖霊も言う”は、シュッツ風で注意を引き、その後この世の労苦を解かれ天国へと向かう様が軽やかに歌われます。

◆ テレマンとバッハのコラボレーション

テレマンとバッハは生涯にわたって深い親交を持ちました。テレマンが6歳先輩で、かつ長生きしています。1722年ライプツィヒ聖トーマス教会のカントールとして、テレマンを招聘しようとしたが断られたため、バッハが招聘されました。バッハは前述したコレギウム・ムジクムもテレマンから引

き継ぎ、ツィンマーマンのコーヒーハウスでコーヒー・カンタータBWV211等を演奏しました。バッハの次男カール・フィリップ・エマヌエルの名付け親はテレマンです。1750年にバッハが死去した時には、バッハの業績を最大限に称える追悼の言葉をテレマンが送っています。

・ **Sei Lob und Preis mit Ehren**／讚美と誉れが栄光とともに BWV231 (BWV Anh.160第2曲) ハ長調
この曲は旧バッハ全集ではバッハの一連のモテットとしてBWV231の番号を与えられていました。しかし、最近では、テレマンとバッハのコラボレーションによるモテット (BWV Anh.160) の一部分と受け取られています。バロック時代には複数の作曲家による合作はしばしば行われ、“パステイッチョ”と呼ばれていました。二人は他にも“エドムより来たる者”という受難曲を、C.H.グラウンの作品を中心に、第1部の冒頭にテレマン、第2部の冒頭にバッハの曲を配置したパステイッチョを作っています。

BWV Anh.160は第1曲と第3曲はテレマン、第2曲はバッハの曲で、クリスマスのカンタータBWV28の第2曲が原曲になっています。モテット化に当たって、オーケストラ伴奏はなくなり、声楽部は歌詞が変えられたものの、曲は結びの部分を除いてほとんど同じです、編曲がどちらの手によるかは不明です。

歌詞はヨハン・グラーマンの聖歌“いざ、わが魂よ、主を頌めまつれ”から採られ、原曲カンタータBWV28ではその第1節が、本モテットでは第5節が使われています。定旋律はソプラノに置かれ、下3声は定旋律とその対旋律を対位法的に絡ませ、バッハの他のモテットに現れるような名人芸的なフーガメロディはなく、坦々と進行する作りです。

・ **Christ lag in Todesbanden**／キリストは死の絆につきたまえり BWV695 (オルガン独奏) ニ短調、3/8
キルンベルガー・コラール集に含まれる3声楽曲で、中声部に定旋律が組み込まれています。この良く知られた復活節の定旋律は初期のカンタータBWV4を始め、BWV158カンタータ、BWV277、278、279、625、718のオルガン曲と多くの楽曲に使用されています。

◆ J.S. バッハ(1685～1750年)モンテヴェルディ⇒シュッツを経てバッハに結実した“ヴェネツィア風二重合唱”

ヴェネツィアで対位法やレチタール・カンタンド様式を徹底的に学んだシュッツは、「ドイツ語聖書全巻を音に」との意欲で生涯を創作に捧げ、ドイツ語モテットの礎を築きました。その実践は弟子たち、取分けCh.ベルンハルトによって「言葉はどのようにして音楽となるかMusica poetica (音楽詩学)」といった理論書にまとめられ、ドイツ中に伝播しました。バッハのモテットはこれらの伝播を総合して生み出された“ヴェネツィア風二重合唱”の最高傑作と言えます。

・ **Komm, Jesu, komm**／来たれ、イエスよ、来たれ BWV229 (1723～32年の間に作曲) ト短調
歌詞対訳に記したように6行詩×(前・後)2段から成る韻文で、その基になっている思想は、ヨハネ第14章6節「私は道、真理、命である。私を通らず誰も父のもとに行けない。」で、詩の核心の訴えとなっています。名曲揃いのバッハの二重合唱モテットに在って、ホモフォニー傾向が強く、対位法よりも和声法(不協和音が顕著に現れる)に重点が置かれています。先ほど演奏したBWV231のシンプルな構成とは対照的で、曲付けは1行目の“願い”から、“救済”、～“来世への憧れ”、～“苦難”～“信頼”、～“信仰告白”の順に各行の意味内容に対応して、《静》～《動》、マドリガーレ風～舞曲風へと、作風を劇的に変化させる充実した見事な構成で、“**Singet dem Herrn ein neues lied**／主に向かって新しき歌を歌え”BWV225と並ぶモテットの最高峰となっています。

前段：“ヴェネツィア風二重合唱”

第1行 願い **Komm, Jesu, komm, mein Leib ist müde.** 大胆な冒頭和音+サラバント舞曲リズム 《静》

第2行 救済 **die Kraft verschwindt je mehr und mehr** 先唱者付きの朗唱レチタール・カンタンド 《動》

第3行 来世への憧れ **Ich sehne mich nach deinem Friede** リート風二重合唱対話 《静》

第4行 苦難 **der saure Weg wird mir zu schwer!** 伝統的なMusica poeticaによるカノン二重合唱 《動》

第5行 信頼 **Komm, komm, ich will mich dir ergeben** 天国に向けたマドリガーレ風交互合唱フーガ

第6行 信仰告白 **du bist der rechte Weg** 舞曲風の長いテーマを変奏して交互に繰り返す二重合唱

後段：“アリア”と表記された4声合唱(コラールとは異なる芸術的歌曲)

幅広い音程での大きなメロディの流れ、減5度などの音程、メリスマ等の高度作曲技法が駆使されています。

モンテヴェルディのマドリガーレが切り開いた“言葉を伝える音楽”は、シュッツ、バッハへと継承されていきました。歌詞をある時は、“語るように歌い(レチタール・カンタンド)”、またある時は、マドリガルの要素(音画技法、修辭的音型)を駆使し、さらにメリスマ、アフェクト(心情)表現、劇的表現等を通じて、人生の喜び、悲しみ、苦しみ、嘆きなど、心の真実を描きました。ルネサンスからバロックに至る、人間性の自由・解放、ヒューマニズムという近代の基盤となる精神活動の一翼を担ったものでした。

藤井良昭(会員)

横浜合唱協会

横浜合唱協会はJ.S.バッハ合唱作品の本格的な演奏活動を目指して、1970年に発足したアマチュア合唱団です。創立以来、J.S.バッハをレパートリーを中心に据えつつ、バロック時代の作品からメンデルスゾーン・ブラームス等のロマン派、さらにマルタン、レーガー、アルヴォ・ペルトなどの近・現代作品まで幅広く取り上げています。指揮者には山神健志氏を、ピアニストに石田宜子氏、ボイストレーナーに木島千夏、小川明子、小林彰英、佐野正一の諸氏を迎え、音楽、発声の両面からご指導をいただき、充実した練習を行っています。また、これまでの定期演奏会では、客演指揮者に小林道夫、若杉弘、黒岩英臣、前トーマス・カントールのG.C.ビラー等の各氏をお迎えしました。バッハ没後250年の2000年には創立30周年記念演奏会としてG.C.ビラー氏をはじめライブツィヒ関係者のご協力を得て「BACH FEST 2000 TOKYO」を開催、2004年にはG.C.ビラー指揮による「マタイ受難曲BWV244b (初期稿)」を演奏しました。1997年に始まったドイツ演奏旅行はすでに4回を数え、バッハゆかりのライブツィヒ聖トーマス教会での礼拝式での演奏をはじめ、タールビュルゲル (夏の音楽祭)、アンナベルク=ブーフホルツ、シュトゥットガルト、クヴェトリンブルクなどドイツ各地での公演を行い大きな足跡を残しました。2015年の4回目のドイツ演奏旅行では、ライブツィヒを拠点に活動する演奏団体アミチ・ムジケ(amici musicae)と演奏交流を深め、ジョイントコンサートを実現しました。今年の10月にはアミチ・ムジケを横浜に迎えて演奏会を予定しています。

正 会 員

[ソプラノ]

平鹿 諭子	飯島 純子	新谷 暁	須賀 由美	藤井 節子	魚本 充子	山田 都
志村 知子	高田 文子	青柳 敦子	広庭 恵美	河野 敦子	渡部 園美	中村さえ子
土田 紀子	北村千恵子	北原 規子	小野 早苗	柏屋麻里子	田口千佳子	

[アルト]

堂崎 律子	新井千鶴子	中野 理子	馬岡 洋子	西田 和子	岩附美知子	山本久美子
藤井美智子	堀内 陽子	中山 典子	水越 淳子	鈴木理絵子	那須比奈子	保田 康子
松村千佳子	堂崎 直美	栃木 真紀	志水 弘美	大石むつみ	高橋 直子	相馬美津恵

[テノール]

藤井 良昭	堂崎 浩	馬岡 利吏	清水 光洋	岡田 亮介	長谷 雅信	柏屋 弘
岩間 昌史						

[バス]

新井 隆士	大石 康夫	飯島 龍哉	天ヶ瀬圭三	山田 直樹	松田圭一郎	若狭 保弘
平鹿 一久	小山 正嘉					

維 持 会 員

鹿島 和子	児玉 弓子	伊藤 邦子	気賀沢忠文	竹村 重雄	万年 武	清水 正子
梅津 実可	中山 元子	武田 サヨ	柴田 秀男	山岡 千秋	佐久間貴美	安広 百代
中西 牧子	藤井可奈子	松下 孝	佐々木聰子	吉崎 桂江	友田 晃利	八尋 直美
鈴木 園子	久保 祐子	村木誠一郎	西連寺利絵	入澤 洋子	鈴木 康司	小野沢 誠
魚本 一司	平井 聡子	平井 透	石川 鮎子	笹井 平	吉川由里子	国分エリ子
小見山雄次	雀部 征宜	鳥山 純一	津守 滋	土井美智子	森岡 剛	白石 洋子
日沖 憲司	本多 志織	加藤 拓朗	松田 久美	山口 綾規	岡崎 希枝	恒吉 理美
森岡 美紀	木村 美保	市川 純也	太田 明子	川越 信彰	新井 光恵	小田 稔
柏木梨重子	飯島 幸子	前田 佳子	大塩 亜季	古根香菜子	和久井一男	松本恵太郎
露木 正樹	二俣 美加	荒井 直子	松尾 裕子	和田 京子	長尾 里美	土井 賢一
今城 明美	大杉 純子	田島 京子	市川 浩子	古根 正治	安積 和彦	山崎 裕子
谷口幸一郎						

横浜合唱協会ホームページ <http://www.ycs.gr.jp>